

台湾数学会訪問記

日本数学会理事・お茶の水女子大学基幹研究院

下川 航也

台湾数学会の第 61 回年会（中華民國數學年會）が 2026 年 1 月 21, 22 日に国立中正大学（嘉義市）において開催された。日本数学会は台湾数学会との交流協定に基づき、毎年交流を行っている。今回は日本数学会から訪問団を派遣する年であり、石毛和弘理事長、久保英夫理事、高木俊輔理事と私、さらに、年会において招待講演者として keynote talk（中文では「共同演講」）をされる東京大学の今野北斗氏の計 5 名による訪問となった。

久保氏は研究打ち合わせの都合により別日程での出発となり、残る 4 名は 20 日に羽田空港より出発のため空港で合流した。同日夜に台湾数学会との交流会が予定されており、それに間に合うように旅程が組まれた。今回の会場が嘉義市であることから、9 時過ぎの便を利用することとなった。この時間でも私を含め何人かは羽田空港へのアクセスは容易でなく、始発に近い時間の公共交通機関での移動となった。約 3 時間のフライトの後、台湾の松山空港に 12 時頃に到着した。松山空港は市街地に隣接しており、街の中に降り立つ印象を受けた。

空港から嘉義市のホテルまでの移動は、当初台湾新幹線も選択肢の一つではあったが、最終的にはタクシーでの移動となった。これは前回の訪問における出来事も要因の一つであると思われる。前回は台中市の国立中興大学が会場であったが、新幹線での移動と乗り換えが思いの外大変であったようである。今回の訪問では、台湾数学会からの事前連絡においてタクシー移動を提案頂いており、それに従う形となった。

入国手続きが終わり出口に向かうとドライバーが既に案内を持って待機していて、すぐに空港を出発する。嘉義市は台北市から 250km あることを事前に把握していて 3 時間位と見積もっていたが、実際そのくらいの時間がかかった。車内では中間地点に差し掛かる頃には到着を待ちわびる雰囲気も見られた。台北市では交通量が多いところもあったが、その後は特に混雑もなく 16 時頃にホテルに到着する。

嘉義市は台湾南西部に位置し、温暖な気候の街である。日本が寒い時期であったので、到着すると大きな寒暖の差を感じる。宿泊先は台湾数学会により手配頂いた Nice Prince Hotel（耐斯王子大飯店）であった。18 時の交流会まで少し時間があつたので少し近くを散策することにする。ホテル併設の複合施設には、日本でも馴染みのある店舗をいくつか見つける。それらのお店での物価は同じくらいか少し高い印象であった。街中では原付バイクの多さが印象的であった。

ホテルの最上階で行われた交流会には久保氏も合流し、台湾数学会からは理事長の謝銘倫氏をはじめ 5 名が出席され、計 10 名での会となる。両数学会の状況について情報交換を行いながら夕食を共にした。両理事長の朗らかなお人柄のおかげでとても和やかな会となる。謝氏は日本を度々訪れており、日本語も堪能で、日本の様々な事情もご存じであった。また、多くの学会関係者や参加者も同じホテルに滞在しており、この日も近くのテーブルにもいらっしやったようである。

翌 21 日は年会初日であり、朝にホテルのロビーに集合し、多くの参加者と共にバスで会場に向かう。国立陽明交通大学の千野由喜氏も合流する。会場の中正大学までは約 11km で、20 分程度の移動であった。中正大学の名前は中華民國初代総統の蔣介石（蔣中正）氏のお名前に由来するものとうかがった。数年前に日本ハムファイターズが台湾遠征をした際に、万波中正選手がその名前から台湾で注目されたというニュースを思い出した。

午前中は 10 時 40 分より年会開幕式、写真撮影、plenary talk（大会演講）が行われた。開幕式でのスピーチは英語が中心で配慮が感じられた。中正大学からは校長の蔡少正氏が挨拶をされた。中正大学は 1989 年開校であるが、既に 3 回目の数学会年会の開催とのことである。その後の plenary talk はブラウン大学の George Karniadakis 氏であり、オンラインの講演であった。講演題目は「From Physics-Informed Machine Learning to Physics-Informed Machine Intelligence: Quo Vadimus?」である。

昼食ではお弁当を頂きながら、台湾数学会および中正大学の関係者と談話する機会となった。

午後最初のプログラムは、13 時から 13 時 40 分に keynote talk が行われた。今回は招待

講演者として今野北斗氏が「Diffeomorphism groups and gauge theory」のタイトルで講演をされた。今野氏の講演は盛況で、高い関心を集めていた。keynote talk は 2

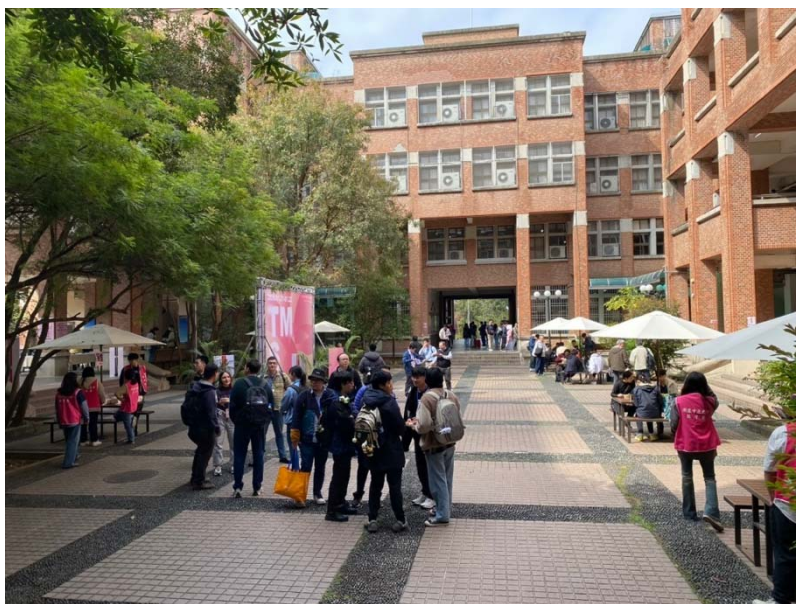


講演の平行であり、もう一つは王振男氏による講演で、題目は「Neural operators for the Dirichlet-to-Neumann map」であった。

その後 13 時 50 分から 15 時 20 分は special session（領域演説）であり、それぞれのセッションで 2 つか 3 つの講演が行われた。セッションは、数論と代数、微分幾何、解析と最適化、偏微分方程式、代数幾何、離散数学、力学系と生物数学、計算数学、確率と金融工学、統計とデータサイエンスの 10 の分野である。トポロジーのセッションは設定されていず、私は微分幾何のセッションに参加した。セッションでの講演も英語で行われ、大変有り難く感じた。

嘉義市の有名な食事はターキーライス（火鶏肉飯）であり、講演冒頭に「ターキーライスを楽しみにしている」と述べるのが定型句となっていたようである。

その後 15 時 20 分から 50 分までは茶会の時間であった。中庭にお菓子が準備され、お茶を飲みながら賑やかに議論が交わされた。また学生のポスター発表もこの時間に行われていた。茶会の雰囲気は大変よく、日本の学会においても参考になるものと感じた。



15 時 50 分からは初日 2 つ目の plenary talk で

は今年度の TMS Academic Prize 受賞者の尤釋賢氏による講演「Green's function and linear-nonlinear wave motions for compressible wave motions」が行われた。

その後、台湾数学会の総会が行われるが、総会に参加しない人々はバスでホテルに移動した。総会の前に次回の年会が行われる大学が発表され、引き継ぎなどが行われるようである。帰りのバスでは千野氏と隣になり、台湾の大学での教育の様子などをうかがった。授業を英語で行うことも可能であることや中国語で行った際の苦労話などをうかがった。研究面では台湾では数学でも応用研究を行うことが求められているようである。私も応用の研究を行っているので、論文投稿先などの情報交換をする。また、台湾での数学分野のポスドクは日本人にとっても魅力的なものであることを教えて頂いた。是非日本からチャレンジする方が増えればと思う。

19 時からはホテルの大宴会場で懇親会が盛大に行われた。参加者は大変多く大きな会場が一杯になっていた。謝銘倫台湾数学会理事長の挨拶の後、石毛和弘日本数学会理事長の挨拶を経て懇親会が開始となった。円卓に着席し、中華料理のコースがアルコールとともに提供された。懇親会では授賞式も行われるが、我々も受賞者らと同じテーブルで素晴らしいもてなしを受けた。授賞式では多くの賞が授与されたが、学生が受賞する際に指導教員も壇上に上がるところが印象的であった。

次の日は年会の 2 日目であるが、日本側の都合により台北から午後の飛行機で帰国する必要があったため、年会には出席せずに帰国となる。ホテルの朝食はバイキングであり、ターキーライスを試す機会もあった。各自でターキーライスを作る形式であったので、正しく作れたかどうかは不明である。朝食では台湾大学の夏俊雄氏と同席し、やはり応用研究もされていることや、最近の生成系 AI の数学研究における活用状況についてうかがった。その時点では私は良いオプションの有料版は使用していなかったが、是非一度使ってみたほうが良いと進められた。その日のうちに使い始めてみると確かに大きな差を実感できた。

朝食後すぐに 5 人で松山空港に向かう。今回は距離を把握しているので途中休憩をお願いします。行きも帰りも長時間の移動であったが、車内での議論は有意義であり、このような時間も必要であると感じた。空港へは順調に到着し、予定時刻までだいぶ時間があったため、軽く食事をしながら議論の続きなどを行った。

今回の訪問においても台湾数学会の皆様には深い敬意とともに温かく迎えていただき、参加者として大変有り難く感じた。これは、これまで両数学会の関係者の方々が交流を絶やすことなく積み重ねてこられたご尽力の賜物であり、心より感謝申し上げたい。国際交流は大変な労力を伴うものとなるが、今後も台湾数学会と日本数学会との交流に多くの方々が関わり、この貴重なつながりが末長く継続していくことを願っている。